

ロマンス諸語と冠詞

岸本通夫

0. 日本ロマンス語学会第17回大会に向けて、統一テーマとして、各方言における冠詞の在り方を問題にしてみただけまいかと提案を試みたところ、幸いにしておとり上げいただくことができ、1981年5月9日(土)、落成後まだ間もない大阪外国語大学の会場において、各方言を担当して下さった6名の学会員各位から、それぞれに貴重な、充実した御報告を仰ぐことができた。それらの御報告も本号に掲載される予定であるが、念のため、ここに各方言とその担当者の貴名を一括しておく：

ポルトガル語	池上岑生
スペイン語	近松洋男
プロヴァンス語	高塚洋太郎
フランス語	島岡茂
イタリア語	古浦敏生
ルーマニア語	林博司

(敬称略)

カタラン語・サルド語・レト＝ロマン語については、今回は見送るほかなかった。

さて、筆者は、問題提起を試みたに過ぎないものであるが、これが一場の問題提起に終わってしまっ
てはいささか無責任ではあるまいと思われる。折角お寄せいただいた御報告を切掛けとして、さらに考
究を発展させ、ついで収束させ、私たちの学会の一つの試みとして、いくらかでもまとまった成果をあ
げるにはどうすればよいか。もとより筆者にこれという考えがあるわけではなく、適切な御提案を引き
出すはずがともなることを念じて、短い一文を草らせていただくことにした。

1.1 顧みれば筆者自身の場合、問題は、幼いころの幼い疑問に端を発しているように思われる。英語
を習い、フランス語を習って、どちらにも冠詞という、日本語にはない品詞のあることを教えられた。
フランス語では、部分冠詞という珍しいものにはじめてお目にかかったが、定冠詞と不定冠詞に関す
るかぎりは、この二通りの冠詞は、二つの言語に共通して存在するもので、しかもその用法・機能につ
いての説明は、まず同様と思われた。少なくとも、「一口に定冠詞といっても、英語とフランス語では
必ずしも全く同じではない」といったような記述のある文法書には、今日に至るまで、接したことがな
い。

にもかかわらず、少なくとも定冠詞については、英語とフランス語の間には明らかなちがいがあ
る。フランスには、したがってフランス語には、Le Havre, La Rochelle, La Ferté, Les
Andelys など、定冠詞の組み込まれた地名がいくらかもあるが、英語には、the を冠せた地名は、
見つけることができない。Le Brun, Le Clerc, La Croixの類の姓 nom de familleも、
フランス語は、次々に数え上げることができるが、この種の姓も、英語には例がない。上のような例は、

フランス語ばかりではなく、イタリア語・スペイン語等にも少なくないので、固有名詞の構成要素となることがあるか、ないかを、ロマンス語の定冠詞と英語の定冠詞の相違点として、あるいは少なくともその一つとして挙げることができよう。

フランス語を習いはじめた当初から、この事が鮮明に問題としてとらえられていたわけではなく、意識の下の片隅に、何となく不思議なことに思われて、引っかかっていたというのが正直なところであった。

1.2 その次の経験は、ギリシア語であった。周知のようにギリシア語には、定冠詞だけあって、不定冠詞がない。これはこれで、確かに幼い筆者を驚かせた一つの事実ではあったが、そのギリシア語の定冠詞には、もっと筆者を驚かせた一つの用法があった。

それは、例えばソクラテスの名が文中に出てくるとき、その名は、定冠詞を伴って、 *ho Sócrátēs* の形をとることである。無論ソクラテスだけに限らない。人の名はおおむね、ギリシア語の慣例として、定冠詞と共に記されるのである。

はじめははなはだ奇異に思われたこの文法現象であったが、一步ふみ込んで考え直してみるならば、必ずしも不合理ではないかも知れない。むしろ定冠詞の定義に沿って、素直に論理を進めるならば、固有名詞は、定冠詞を伴うことこそ理にかなっているという考え方も十分に成り立つのではないか。

例えば「月」と「太陽」は、*la lune, le soleil* のように、定冠詞を伴った形で文中に見われるのが通例であるが、それはなぜかといえば、「月」といえば、29日半の周期で満ち欠けを繰り返すあの月をさすのが通例であって、特に断りのないかぎり、この語のさす指向対象が特定化されているからであり、「太陽」の場合も同様に、この名詞の指向対象は、毎朝東の空に昇るあの太陽に特定化されているからである。そして人が「ソクラテス」という場合、そのソクラテスも、全く同様に、獄中 *ciguë* の毒を仰いで従容として死についたあのアテナイの哲人という特定の人物を指向しているのだから、*la lune, le soleil* という表現が用いられるのが正常なのであれば、全く同様に、*ho Sócrátēs* という表現こそむしろ正常ではないか。

にもかかわらず、フランス語では、*le Pascal* とか、*le Boileau* とかいはれることはない。

けれどもしかし、1) 同じ固有名詞でも、*France, Europe, Seine* など、しばしばまたは必ず、定冠詞と共に用いられるものもあり、また2) 古浦さんの御報告で教えられたように、一方には *il Boccaccio* 以下の定冠詞を伴う人名があり、一方には *Cavalcanti* など無冠詞で用いられる人名もあるという、イタリア語のような場合もある。

一般的・抽象的に定義を与え、文法上の機能を説明するかぎりでは、同様のものであるはずの冠詞であるが、特に定冠詞については、個々の言語について具体的・個別的にその用法を点検してゆくと、必ずしもそれほど単純明快に一律なものではないように思われる。

1.3 もう一つだけ冠詞に関連した筆者の経験をこの機会に摘記させていただく。ギリシア語には定冠詞しかなく、不定冠詞の欠けていることが、なにか跛行的な感じで、奇異に思われたことを上に記したが、やがてその類の言語がギリシア語だけではないことを知らねばならなくなった。筆者の見聞の範囲では、アルメニア語・ハンガリア語・ヘブライ語・アラビア語・バスク語において、定冠詞はあるが、不定冠詞のない言語の例が見出だされる。

ここにあるいは注目に値するかも知れない一つの事実がある。というのは、冠詞の種類を一応定冠詞

・不定冠詞・部分冠詞の三種に限定してみても、それらの冠詞の有無という類型学の観点からいくつかの言語を観察してみると：

A. 冠詞のない言語

日本語・ラテン語・ロシア語・フィン語・トルコ語、等々。

B. 冠詞のある言語

B 1. 定冠詞のみの言語

ギリシア語・アルメニア語・ハンガリア語・ヘブライ語・アラビア語・バスク語。

B 2. 定冠詞と不定冠詞の言語

英語・ドイツ語・スペイン語・ルーマニア語、等。

B 3. 定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の言語 フランス語・イタリア語。

以上の通りであって、組合せの可能性からいえば、不定冠詞はあるが、定冠詞の欠けた言語なども考えられるにもかかわらず、どうもそのような言語は、実際にはどこにも存在しないようである。当然といえば当然のような感じもするものの、あらためてなぜかと問われた場合、この問いに筆者自身は、快刀乱麻を絶つような答を出すことはできない。

多少ともこの事実に関連すると思われるもう一つの事実を挙げるとすれば、今回お寄せいただいた六つの報告を概観して、主として定冠詞の方が問題にせられていることである。筆者自身の場合も含めて、冠詞といわれてまず念頭に浮かぶのは、不定冠詞よりは定冠詞の方ではあるまいか。

2.1 鮮明に問題として意識されたわけではなかったが、同じ定冠詞の名で呼ばれ、全く同様の定義を与えられていながら、実はその定冠詞にしても、それぞれの言語によって、その実態は必ずしも一様ではないという感じが久しく意識の下にわだかまっていた。どうやら40年という歳月を経てようやく疑問はいくらか問題らしい形を成し、互いに近い関係にあるロマンス語諸方言の間では、実状はどんなものであろうか、定冠詞が後置されるなど、二三の点で特色を示すルーマニア語の場合を別にすれば、残りのロマンス諸語の間には、冠詞の用法という点では大差はないものかどうか、ルーマニア語の冠詞のやや特異な用法はどう考えればよいか、すべてそれらのことについて、ともかく各方言の専門の各位からお話をうかがってみることはできないものか、というものが、問題提起を試みるに至るまでの筆者の場合の内幕である。

2.2 さて5月9日午後の六つの御報告を通して、何よりも教えられたことは、問題をロマンス語の範囲にかぎるにしても、及ぶところは、広くかつ深いということである。しかし6名の方がそれぞれの観点から問題をとり上げて下さったので、ともかくロマンス諸語に関するかぎりでは、冠詞についての問題点だけはほぼ出つくしたとあってよいのではないかと思われる。そこで当日の諸報告を拜聴することを通して、筆者自身の眼に問題点のように思われるに至った諸項を、つまりはなはだ主観的な要約を以下に摘記させていただこうと考える。

3.1 通時論的問題 — すなわち冠詞における進化の問題である。いうまでもなくラテン語には冠詞はなかったので、ロマンス諸語の冠詞は、各方言の成立の過程の中で、並行的進化の結果として、各方言ごとにそれぞれ成立を見るに至ったものである。十分に豊富な文献に恵まれているわけではないが、残

されている俗ラテン語の文献を通して、定冠詞・不定冠詞のでき上ってゆく状況を、少なくとも何らかの程度に追跡することが可能であろう。定冠詞の成立と不定冠詞の成立の間に先後関係があったか、あったとすれば、どちらが先であったか、などは、興味深い問題かも知れない。

3.2 語形について — 結局は進化の問題のうちに包摂されるわけであるが、特に定冠詞の方の、語形の変遷と各地の方言形のことが、これはこれで、優に一つの問題である。ポルトガル語で頭音の l- が落ちて、o, a; os, as という形に落ち着くまでの経緯がなかなかの問題であるし、プロヴァンス語の諸方言形を高塚さんが問題にされたが、おそらくイタリア語の場合にも同じ問題があるろう。

3.3 ipse に起源をもつ定冠詞 — ロマンズ語の大部分の方言において、定冠詞は、ille の諸形に基づいていて、ipse から来た形が定冠詞として確立したのは、ほとんどサルド語のみであるが、南仏とカタルニャ・バレアル諸島の各地の方言には、定冠詞としての ipse の諸形がかなり広汎に痕跡をとどめている。ipse : ille の競合の状況と ipse の方の衰退の過程を跡づけることも一つの課題であろう。

3.4 フランス語の特殊性として、語末の子音、なかでも特に名詞・形容詞の複数の標識 *marque* としての -S が黙音化 *amuïssement* した結果、前におかれる定冠詞・不定冠詞に、数（および性）の標識の機能が移り、その意味で、フランス語では、冠詞の重要性が増したことを島岡さんは指摘された。一般論・原則論として充分理解できることであるが、具体的な実例を挙げて、他方言との比較の中から、フランス語の冠詞が実際にどの程度まで重要性を帯びるに至っているかを明らかにすることは、はなはだ興味ある問題ではあるまいか。

3.5 部分冠詞の問題 — 冠詞の範疇の一つとして部分冠詞の確立しているのは、フランス語・プロヴァンス語・イタリア語のみであるが、前置詞 *de* の用法のなかに、一般に *partitif* と称せられる用法を探してみれば、スペイン語その他にもその種の例は見出だされるのではないか。フランス語においても *de le > du, etc.* の安定した形に落ち着くまでには；

de + 定冠詞 （+名詞）

のほか

de（無冠詞）（+名詞）

de + 所有形容詞 （+名詞）

の形式をフランス語史の中から抽出できることが報告せられたし、

de + 品質形容詞 （+名詞）

の形式は、今日も生きている。部分冠詞という名称にとらわれず、*partitif* の意味が、諸方言において、それぞれにどのような表現形式を見出だすに至っているかを比較検討してみることは、これもまた興味をそそる一つの問題ではないか。

3.6 不定冠詞の複数形 — およそ定冠詞とならんで不定冠詞をもつ言語において、その不定冠詞は、基数詞の 1 そのもの（フランス語 *un, une*, ドイツ語 *ein, eine, ein*）か、またはその弱まった形（ルーマニア語 *un, o*, 英語 *a*）である。そこで、もつとも単純に論理を進めるならば、“1”の複数とは、論理的には、矛盾であり、あり得ない道理であるから、不定冠詞の複数形はあり得ないはずであるが、実状は必ずしもそのような簡明な論理には従わず、一方には、I) 英語・ドイツ語・ルーマニア語のように、不定冠詞の複数形のない言語もあるが、II a) 類推によって形式的に不定冠詞 *uno*,

una の複数形 unos, unas をつくり、これに“若干数の”の意味をになわしているスペイン語の型 type の方言と、Ⅱb) 部分冠詞 du, de la に基づく複数形 des を、不定冠詞の複数形として用いるフランス語の型の方言とがある。

Ⅱa) 型・Ⅱb) 型とも、今日の安定した状況に落ち着くまでに、どのような経過ないし変遷があったものか、これも調べてみるに値する一つの問題かも知れない。

3.7 冠詞と名詞の相対的位置関係 — 手短かに言えば、冠詞が名詞の前に置かれるか、後に置かれるかの問題である。ロマンス語のなかで、定冠詞が後置されるのは、ルーマニア語だけであるが、ほんの少し視界を広げれば、周知のように、スウェーデン語・デンマーク語など、北欧に定冠詞後置の言語があり、アルメニア語の定冠詞も後接せられ、さらにバルカン半島では、ルーマニア語だけではなく、アルバニア語・ブルガリア語に同じ現象が見られる。ここで注意してよいと思われるのは、これらの後置冠詞が、以上のいずれの言語においても、直前の名詞(形容詞)と一体化して、接尾辞のように添えられることである。この現象について、泉井久之助教授は、御高著「ヨーロッパの言語」(p.97以下)において、接尾冠詞は、名詞との接合・密着の度が一層高いのであると説明しておられるが、密着度が高いとは、具体的にはどういうことであるか、なお一步踏み込んだ考究の余地が残されているように思われる。

関連してなお一つ、定冠詞は、上の諸言語の場合のように、接尾される例があるが、不定冠詞が名詞のあとに添えられる言語というのは、その例が見出だされないのである。なぜ? これもおそらくしかるべき理由がなくはないのであろうが、あらためて一つの設問として提示されてみると、単純明快な答えの容易には見出しにくい問題の一つであるかも知れない。

3.8 ルーマニア語の場合 — 最後にルーマニアの定冠詞の種々相を一瞥して、冠詞の諸問題を数え上げることの結びとしたい。

まず、ルーマニア語の冠詞は、定冠詞・不定冠詞のほかに、ルーマニア語の文法において、所有冠詞と通称されるもの、および前置冠詞と通称されるものがあって、一見したところ複雑多岐にわたるがごとくである。しかしながらこのうち所有冠詞というのは、泉井教授が説いておられるように(「ヨーロッパの言語」p.135-6)、一種の代名詞であって、真正の意味の冠詞ではない。

次に、いわゆる前置冠詞はというと、これは、まずその用法を略説してみると、i) フランス語で Alexandre le Grand というときに、ルーマニア語はこれを Alexandru *cel* Mare と表現し、また ii) 最上級の le plus grand を *cel mai mare* という。いうまでもなく、*cel* というこの形は、**ecce - ille* に起源をもち、従って、語源の上では、フランス語の *celui* などに対応する形であるが、上の用法から容易に理解されるように、定冠詞・不定冠詞のほかに第三種の冠詞があるというわけではなく、むしろ精確には定冠詞第2形とでも称すべきものである。

そこで一見複雑そうな観を呈するルーマニア語の冠詞も、基本的にはやはり、定冠詞と不定冠詞の2種に尽きるのであると理解してよい。

3.9 ルーマニア語の冠詞の用法について、最後に是非一言を要すると思われるのは、前置詞と定冠詞との相関の問題である。一例をあげるならば、フランス語で *sur la table* というとき、ルーマニア語では、*pe masă* という。すなわち、前置詞のあとに立つ名詞に対しては、定冠詞を用いないのである。しかもこの原則には一つの例外があり、前置詞 *cu* の場合のみは、*cu coarnele*, すなわち

avec *les cornes* のように、定冠詞を伴う名詞が後続する。

この現象の背後に働いているのは、どのような心理あるいは論理であるか。かつまた何故に前置詞の *cu* のみが例外をなすのであるか。これもまた一つの興味ある問題であろう。

4. 5月9日の諸兄の報告を通して浮かび上がったロマンス諸語における冠詞の用法の包蔵する問題点を、はなはだ勝手な仕方でもとめてみると、以上の通り、一応 3.1 より 3.9 に至る 9 つほどの問題を数えあげることができるかと考える。個々の方言における冠詞についての論考は少なからぬものがあると思うが、各方言における冠詞の問題を鳥瞰したところに成立するべき「冠詞のロマンス語比較文法」とでも称してよいような研究は、あるいは今なおあまり開拓されていない領域であるかも知れない。今回の統一テーマについての諸兄の貴重な報告を契機として、この問題についての考究を深化してゆくためには、どのような形で問題をとり上げればよいか、学会員各位からの御提案を仰ぎたく、そのための一助ともなればとの趣きで、一つの総括を試みたものである。

(1981年11月20日)